

『新修 泉佐野市史
第5巻・史料編中世Ⅱ』

『新修泉佐野市史』の史料編中世Ⅱが、小山靖憲氏を編集委員長として、2001年3月刊行となった。日本中世の社会史、または荘園史を志すものにとって待望の自治体史史料編の刊行である。

現在の大阪府泉佐野市の大半を占める中世の九条家領日根荘が、戦後の中世史研究の中でどれだけ重要な位置を占めてきたかについては、他にも多くの論者がいる。ここでは日本中世史研究にとって、かくも重要な荘園を抱えた泉佐野市が、基幹となる中世史料編を出すに当たり、配慮した点について検討したい。

いうまでもなく自治体史は、現在そこに居住する人々に地域の歴史を還元するために、読みやすく、分かりやすい論述が求められる。

読者は地域の住民であることが大前提である。ところが、こと泉佐野市に限って言えば、現在低迷を続ける中世荘園史研究のカンフル剤ともなるほどに豊富な情報をもつ『政基公旅引付』が描く日根荘を擁する点で、最前線の研究者からも注目的となっていた。市民に分かりやすく、研究者に納得される自治体史という点で、最初から大きなハードルを抱えていたといつてよい。

すでに本史料集刊行の直前、1996年に和泉書院から中世公家日記研究会編による『政基公旅引付』本文編・索引編・研究抄録編が刊行されている。当然、本史料集と扱う素材は重複しており、自治体史としての独自性が問われることとなる。

今回刊行された史料集は、本文805頁の内、日根荘史料の中心となる『政基公旅引付』が約450頁を占め、これに参考史料として「九条家文書」「九条満家公引付」「後慈院院殿御記」「政基公旅引付」紙背文書など関連史料を博搜し、200点以上の古文書を収録している。これだけでも地域の中世史研究のメインとなる荘園の情報としては充分といえるが、『新修泉佐野市史』の特徴は、単に地域の史料情報を網羅したという点だけではない。

今から約20年ほど前、荘園研究を志した私にとって、日根荘はいつか訪れたいあこがれの荘園であり、また『政基公旅引付』は必ず読まなければならない基本史料であった。しかし、本書に掲載されている九条家関連の諸史料は、宮内庁書陵部に収蔵され、当時は明治書院から図書寮叢刊として刊行されていたが、すでにほとんどの新刊在庫は掃けてしまい、古書店でみる『政基公旅引付』は一学生が簡単に買える値段ではなかった。さらに、関連史料である図書寮叢刊本『九条家文書』は、荘園の文書群が数冊にまたがって翻刻されており、全体を把握するには莫大な費用を要した。

現在の日根荘故地は、鎌倉時代の日根荘絵図に描かれた景観を十分にたどることのできる環境にあり、地元の方たちが文化財を手厚

く保護してきた歴史を知ることのできる地域である。しかし、先のような史料状況の中では、地域の方たちが広く中世日根荘の史料情報を得ることの困難は、想像に難くない。

自治体史の本務である、「住民に分かりやすい歴史」を目指した『新修泉佐野市史』の取り組みは、こうした入手困難な史料群をまとめて紹介するのみでなく、引付史料のすべてを読み下しに改め、人名・地名をのぞいた片仮名表記をひらがなとして、読む人の抵抗感をなくした。史料集の中心が引付であることから、体裁としては和様漢文体でびっしりと漢字が並ぶ紙面になるところ、平易な読み下しに改めるという作業は、読む側にとって大変ありがたい反面、史料集作成者にとってこれほど神経をつかう作業はない。これは歴史研究者の間の史料の「読み癖」を一般化、普遍化することにもつながる。「市民のための史料集」を作成するために、担当執筆者が払われた血の滲むような努力が伺われる。

さらに中世史料特有な難解な単語、用語には紙面の三分之一を割いて頭注を付し、各頁ごとに詳しく解説を行っている。『政基公旅引付』の作成者である九条政基は、いうまでもなく公家であり、中世における知識の最高峰に立つ人物でもある。彼が記す記事の中には、中世最末期の公家社会の慣例が生き、さらに混迷する和泉国の戦国期の緊張関係が縷々つづられている。これらについては、九条政基の年譜や関係系図を含む詳しい解説を付け、引付の登場人物は80頁以上も割いて人名一覧で詳細を解き、「九条家家司・被官・従者一覧」や、「和泉両守護・守護代・奉行人・守護被官一覧」、「日根野・入山田村 番頭・職事一覧」など、『政基公旅引付』以外の関連史料をも駆使して作成された詳細な図表が、複雑な人間関係や、九条政基の置かれていた状況を理解する助けとなる。

実権の衰退した時期の公家社会とはいえ、関白までも極めた九条政基は、年貢を着服した家司の唐橋在数を殺害するまでに追いつめられていた。この事件を契機に日根野に下向

した政基が、現地でどのように莊務をこなし、自分の生きるすべを見つけるために細川京兆家に近づいていったか。日根莊故地に住む、泉佐野市民に興味のわからないはずがない。

戦国乱世の公家の日記というだけでも立場を理解するには相当の努力を要する史料を、より広く多くの読者に提供するため、現在の研究水準の最高の成果を投入しつつも、読者を突き放すことなく、切り捨てることなく、得られる情報の多くを最大限の努力で簡潔にまとめ、提供した自治体の中世史料集は、市民に目を向けた自治体の取り組みとして高く評価されるものと思う。

欲をいえば、いずれも一般の市民が通常見ることのできない史料であることから、写真図版により、『政基公旅引付』以外の史料についても収蔵状況などの保存の現状が分かると、史料そのものの大切さも含めて、市民に提供することができたのでは、との感もある。ただし、歴史館いずみさので、レプリカ作成などによりこうした情報の提供をビジュアルに行っているので、逐次この点も解消されるのであろう。

福島紀子・松本市文書館